

書評

Stephen Cross,
*Schopenhauer's Encounter with Indian Thought:
Representation and Will and Their Indian Parallels,*
University of Hawai'i Press, 2013.

岡本聡太郎

1. 本書の内容と立場

ショーペンハウアーがインド哲学に強い関心を持っていたことは広く知られている。また、彼の思索にはインド哲学の影響が見られることも明らかである。彼の著作を読めばすぐさま、いたるところでウパニシャッドや仏教の話題が登場することに気が付くだろう。しかしこれらのインド思想は具体的にどのような点でショーペンハウアーと類似しているのか。このような関心や影響は、実際にショーペンハウアーの思想形成と関わっているのか。ロンドンの *Temenos Academy* の委員である著者 Stephen Cross は、このような関心のもと本書でショーペンハウアーの哲学とインド哲学を主題ごとに分析し、比較・考察している。

本書が著された理由の一つは、このようなテーマに関する包括的な研究が近年なされていないことである。著者によるとそのような研究で最も新しいものは Max Hecker の *Schopenhauer und die indische Philosophie*(1897)であり、その後大きく発展したインド学における哲学的・文献学的研究の成果はほとんどショーペンハウアー研究に取り入れられていないのである。また、西洋と東洋の思想的な対話を深めたいという著者の意向も本書全体を支える大きな動機である。というのも著者の考えによると、哲学はまさにその本性からして文化的境界に束縛されることはないからである。

このような研究には二つの全く異なったやり方、すなわち歴史的観点からヨーロッパ人がインド哲学を受容する過程とその影響を考察する方法と、比較研究の観点から両者の類似点を分析する方法が考えられるが、本書は後者を採用する。前者のような歴史的な考察を行うためには、ショーペンハウアー自身の蔵書やそこに書き込まれた彼自身による注釈を徹底的に研究する必要があるが、そうした研究は近年やっと始まったばかりであり、今はまだ具体的な影響関係をはっきり指摘できる段階ではないからである。

本書の記述は全体として、ショーペンハウアーの哲学における諸概念、とりわけ表象と

意志の概念を簡潔に解説した上で、インド哲学におけるそれらの対応物を考察するという形で進められる。インド哲学といってもそこにはきわめて多様で広範な思想的営みが含まれているが、本書が中心的に扱うのはヒンドゥーイズムにおけるウパニシャッドとヴェーダーンタ学派、仏教における中観派と唯識派であり、ジャイナ教にはほとんど言及しない⁽¹⁾。本書の構成を大まかにまとめると、ショーペンハウアーのインド思想に対する関心とその背景(1-4章)、表象とそれに関連するインド哲学の見解(5-8章)、意志とそれに関連するインド哲学の見解(9-13章)、意志の存在論的身分と究極的現実の本性(14-17章)となっており、ショーペンハウアー哲学のトピックを順番に考察する形になっている。しかし各々の章は基本的にショーペンハウアー・ヒンドゥーイズム・仏教のいずれか1つに論点を絞ってまとめられているため、関心のある部分だけ拾い読みすることもできるし、ショーペンハウアーとの関係抜きでインド哲学の入門として利用することも可能である。

このような記述の形式は、著者自身のインド哲学に対する態度を反映していると思われる。というのも著者の関心は歴史ではなく哲学であり、それゆえ第一にそれぞれの立場を独立に分析することが大切になるからである。もちろん両者の間に影響関係があればそれだけいっそう興味深い研究となるだろうが、類似した思想の比較検討だけでも哲学としては十分刺激的であり、得るところも多いのである。

2. オリエンタル・ルネサンス

導入部に続く本書の第2章ではまず、ショーペンハウアーの生きた時代の特徴を紹介している。ショーペンハウアーとインド哲学の関係を扱うにあたってまず考えなくてはならないのは、彼が「オリエンタル・ルネサンス」と呼ばれるインドに対する強い関心の時代に生きていたということである。最初のきっかけは Charles Wilkins によるバガヴァッド・ギーターの英訳(1784, ショーペンハウアーが生まれる4年前)、William Jones によるシャクンタラーの英訳(1789)であり、これ以降新たな知識が次々とヨーロッパにもたらされるようになった。またこれとは別に、フランス人研究者 A.H. Anquetil-Duperron によるウパニシャッドのラテン訳 *Oupnek'hat* もこの時代に大きな影響を与えた。これはペルシア語からの重訳であり内容に不正確な点もあるが、ショーペンハウアーが生涯愛読した書物でもある⁽²⁾。彼らの関心はインドそのものに関する独立したものではなく、むしろインドを通してヨーロッパの精神を再興しようという動機に基づいたものであったが、いずれにせよ、歴史上はじめてヨーロッパ人がインド哲学に目を向けた時代にショーペンハウアーが生まれたことは、彼の思想形成上きわめて重要な出来事である。

しかしながら、ショーペンハウアーが西洋哲学の伝統の上に立つ哲学者であることも忘

れてはならない。著者が指摘するのはインド哲学とのアプローチの違いである。カント哲学の継承者を自負するショーペンハウアーにとっては「世界はどのようなものであるか」という哲学的な問題がはじめにあるのに対して、インドの思想家は総じて宗教的・倫理的な事柄、すなわち解脱という実践的問題を第一のものとする。それゆえ我々読者も常にこの違いを意識しながら両者の比較・検討を行うべきである。さもないと、インド哲学に引きずられて西洋哲学者としてのショーペンハウアーの独自性を見落とすことになってしまうだろう。

3. ショーペンハウアーとヒンドゥーイズム

さて、ここからは本書の記述の中心である、ショーペンハウアー思想と類似しているとされるインド哲学の個々の学派を、主だったトピックを挙げながら見ていこう。第一に取り上げなくてはならないのはインド全体の文化的な支柱であるヒンドゥーイズム、とりわけウパニシャッドとシャンカラに代表されるヴェーダーンタ学派であり、本書では3・7・11章で扱われている。本書の記述によると、ショーペンハウアーは1814年、ヴァイマルの東洋学者 Friedrich Mayer によって古代インドの哲学に導かれて以来インドに強い関心を抱き続けたのであるが、なかでも彼を魅了したのは伝統的なブラフマン-アートマンの思想であった。前者は宇宙全体をすべる原理であり、後者は個の最終的な源泉であるが、両者は究極的真理の立場からは同一であると考えられており(梵我一如)、ブラフマン-アートマンは不変の絶対的現実である。我々は普段経験的真理の立場から考えるゆえにそのような真理を認識せず、不断の変化のうちに生きていると考えがちであるが、そのような状態はマーヤー(māyā, 幻影)に過ぎないと言われる。

ブラフマン-アートマンとマーヤーのこうした関係はショーペンハウアーの考える意志と現象の関係にきわめて類似しており、彼自身好んでマーヤーという語を使用している。しかしここに実際の影響関係は存在するのだろうか。おそらくそうではないだろう、というのが本書の主張である。ショーペンハウアー自身も「ウパニシャッドを構成する個々きれぎれの箴言はどれも、私が伝えようとする思想から結論として導き出される」と述べていることから分かるように、彼にとってウパニシャッドやウパニシャッドに基づいたヴェーダーンタ学派の思想は第一に自分の思想を権威づけてその正しさを保証するためのものであり、彼が直接そこから新たな洞察を得たということはないと考えられる。むしろ本書が強調するのは、ショーペンハウアーが19世紀当時の平均よりもずっと正確な知識を持った上で、自らの思想との類似点を意識していたという事実である。これは仏教に関しても言えることであるが、ショーペンハウアーとインド哲学の類似性は通常考えられている

より遥かに大きく、ショーペンハウアーはヨーロッパ哲学とインド哲学の架け橋をなす重要な存在であることが指摘されている。

4. ショーペンハウアーと仏教

次に、ヒンドゥーイズムと並んでインド哲学の二大支柱をなす仏教に関しては、4・6・12章で大乗仏教(Mahāyāna)を代表する二つの学派、中観派(Mādhyamika)と唯識派(Yogācāra)が取り上げられている。仏教がヨーロッパに広く知られるようになったのはヒンドゥーイズムより後のことで、信頼できる資料は1820年代以降になって登場するが、ここでもショーペンハウアーは1811年にゲッティンゲンで受けた Arnold Heeren の講義で早くも強い関心を示している。

ショーペンハウアーの哲学との関係で興味深いのは、万物は独立した実体性を持たず他によって生じるのみであると主張する中観派の徹底した縁起(Pratītyasamutpāda)思想や、心の根底にありそこから一切の主客形式、ひいては一切の経験が生じるとされる唯識派の阿頼耶識(ālaya-vijñāna)である。しかしここでも本書は個々の思想をそれぞれショーペンハウアーとは独立に考察しているため、詳しい説明は控えて概略だけ確認しておこう。ショーペンハウアーが仏教に関心を持った理由として本書が指摘しているのは、無神論であっていかなる創造神を認めないこと、道徳的規範が優れていること、涅槃が経験を越えた現実の本性を示していることの3点である。いずれの点も仏教の特徴である実践重視の傾向、涅槃を第一の目標とする態度がはっきりと表れている。ショーペンハウアーは概念の学である哲学の限界、すなわち思弁的営みの限界を常に意識していた一方で、美や倫理の領域にその限界を超える手がかりを求めた人であったが、この点で彼は仏教と共通の目的を持っていたとすることができるだろう。

5. シャクティ

最後に、個別の内容としてもう一つだけ特別に取り上げておきたいのが、13章で言及されるインドの民間信仰のシャクティ(shakti)である。シャクティとはヒンドゥーイズムにおいてあらゆる生命を可能にし全世界を維持する力であり、とりわけ性的なエネルギーとして現れる。それはそれ自体で直観的に把握できるものではないが、カーリー(Kālī)やドゥルガー(Durga)といった破壊と殺戮を好む恐るべき女神の形で表される。驚くべきことに、この説明はほとんどそのままショーペンハウアーの盲目的な生への意志の説明としても当てはまる。ショーペンハウアーにとっても生への意志は個体を越えた種族全体の保存を求める抗いがたい力であり、生殖において最も純粋に現れるからである。シャクティについて

はショーペンハウアーの死後やっとヨーロッパに知られるようになったため、直接の影響関係を見出すことは難しいかもしれないが、このシャクティという概念においてヒンドゥー世界とショーペンハウアーは最も接近していると著者は主張している。シャクティに関してはこれまで全くと言っていいほど言及されてこなかったゆえ、著者のこの指摘は注目に値する。シャクティを扱った部分は本書のうちでも10ページほどしかなく、ショーペンハウアーの哲学を扱ううえでどれほどの重要性を持っているかは今のところ未知数であるが、将来の研究で具体的な内実が明らかになることを期待したい。

6. まとめ：ショーペンハウアーとインド思想

本書ではヒンドゥーイズムにおいても仏教においても、ショーペンハウアーの表象論・意志論に対応する思想が見出されることがはっきりと示されている。時代も地域も異なっているショーペンハウアーとインド哲学の諸学派が、それぞれの思想的伝統に基づきながらもこのような著しい類似性を示していることはこれまでも指摘されてきたことであるが、包括的な研究であるという点で、また大乘仏教や中観派などの個々の学派レベルで考察を行ったという点で、本書は新たなショーペンハウアー理解に寄与することだろう。

しかし一方で、ショーペンハウアー個人への影響関係については概略のみで細かい分析を行っていない点が本書のもどかしい点であり、最大の特徴となっている。なるほど、両者の間に著しい類似点が存在することはこれまでに以上に具体的に示された。しかしその類似は実際の影響によるものなのか、それとも単なる偶然であるのか、我々としては是非ともはっきり教えてほしいと思わずにはいられない。先行研究が不足しているというやむを得ない理由もあるのかもしれないが、この点に関して推測という形でもよいのでもう少し言及してほしかった部分である。しかしそのような歴史的事柄ははじめにも述べたように著者の主な関心ではない。筆者自身が明言しているわけではないが、本書の目的はむしろ、東西の哲学者や学派をできるだけ個別的に記述・整理したうえで比較することで、ショーペンハウアーの哲学の特徴をより鮮明にすることにあると思われる。ショーペンハウアーの哲学とインド哲学は時代も場所も遠く離れているが、むしろそれゆえに両者の類似点は興味深い。我々はこのような比較によって、これまでとは違う新鮮なまなざしでショーペンハウアーを捉えることができるからである。このことから考えるに、本書は単独の研究として読むより今後のショーペンハウアー研究のための足掛かりとして読むのが適切であろう。本書で得た個別的な分析を踏まえて、読者自身が関心のある部分に焦点を定めてより詳細な調査を行えばよいのである。

註

(1) ショーペンハウアーはジャイナ教に関してあまり知識を持っておらず、仏教と類似のものと考えていたようである。(cf. Von Glasenapp, 1960)

(2) この翻訳はムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーンの子シコーが訳させたものであるが、韻文・非韻文の区別をしない、逐語的過ぎて曖昧である、理解の助けとするためにサンスクリットの用語がペルシア語化されているという問題点が指摘されている。したがって、それをもとにした Duperron のラテン訳も正確さの点ではかなり疑わしいものである。

文献

Magee, B. (1983). *The Philosophy of Schopenhauer*, Oxford: Oxford University Press.

Von Glasenapp, Helmuth. (1960). *Das Indienbild deutscher Denker*, Stuttgart: K.F.Koehler Verlag.

[京都大学大学院修士課程・哲学]